

研究ノート

現代人の御朱印巡り行動と宗教意識について

—— 今後の研究に向けて ——

津幡 法胤

一、はじめに

前回の研究では、「宗教心理学から見た教化の一考察―慰霊行動とそれに関わる意識について―」いくつかの世論調査のデータから現代人の宗教意識の時代別、年代別、性別の変化についてまとめ、布教化のあり方を一考察した。時代差では、一九九八年と二〇〇八年を比較したNHK放送文化研究所の研究より、全年代ともに「死後の世界」はやや増加している傾向があることが示唆された。また、藤山みどり^{※2}はこれまでの宗教トピックスをまとめた結果、一九八五年から一九九五年にかけて起こった死後の世界ブームが再び訪れることを示唆している。これらのことから、二〇〇〇年代に比べて二〇一〇年代は「死後の世界」、「見えない世界」「宗教の教え」など宗教的な関心が増えている傾向が示唆された。

さらに、年代差で見ると、高齢者に比べて若者が「見えない世界」を信じる傾向が強く、性別で見ると男性より女性の方がその傾向が強いことが示唆された。その中でも特に二十代～四十代の女性がこの傾向が強く、逆に六十代以上の男性はその傾向は弱い。しかし、二十代～四十代の女性の方は「宗教の教え」や「仏教」に対して好感度を持つ

ている人の割合が多いことが分かった。

以上のことから、現代人の宗教行動と宗教意識を見ていくと、「二十代から四十代の女性」は宗教に対して好感度が高いという点で重要であることが示唆された。

二、御朱印ブームの実態と目的

近年、女性と関連する宗教行動と言えば、「御朱印ブーム」「御朱印ガール」というものが流行っている。二〇一五年五月一日に発行された「中外日報」の記事では「ブームと教えの狭間で」という見出しで書かれており、御朱印ブームによって朱印帳を持ってお寺に訪れる一般の方が増える一方で、御朱印や御首題をスタンプリイのように参拝記念としてしか見ていない人が増えたことに頭を悩ます寺院の姿が書かれている。ブームによって、普段からお寺に慣れ親しんでいない人々の参拝が増えることによって、こうした問題が新たに寺院を取り巻いているのである。

そこで、ここでは御朱印巡り行動の実態を調査する前に、まず御朱印巡り行動の歴史やそれを取り巻く心理面をまとめ、御朱印巡りの行動を対象とする研究意義を整理することによって、今後の御朱印巡り行動の実態を調査する研究につなげることを目的とする。

三、御朱印の歴史

今、ブームとなっている御朱印巡りの「御朱印」はいつ頃から行われてきたのだろうか。現在、御朱印巡りで多くの一般書籍で監修している八木透は「決定版御朱印入門」^{※4}のなかで、御朱印の歴史について「その歴史は古く律令時代まで遡る。平安時代以降は、朱印に代わっていわゆる「花押」が一般化し、朱印は一旦廃れてゆく。しかし、室町時代後期に至り、戦国大名たちが出す文書類に印が捺されることが慣例化してくると、朱印はふたたび正式文書の発

行者とその責任を示すためになくてはならない存在となる。これがいわゆる「朱印状」である。（中略）戦国大名たちの朱印状が近世にはさらに普及し、江戸時代には、家臣への安堵や社寺への寄進などの際には必ず朱印状が用いられるようになる。またそこでは、黒印は朱印と比べて格式や命令の強制力が低いとみなされるようになっていった」と述べている。つまり、御朱印の歴史は律令時代から始まっているが、江戸時代になってようやく使われ始めたことが分かる。

江戸時代以降について八木は「納経の見返りとして寺院が参拝者に朱印を授与するようになるのはさほど古いことではなく、近世に社寺参詣を目的とした旅が普及して以降のことである。特に明治以降は庶民の社寺参詣が著しく増加し、その中で、やがて今日見られるような『御朱印帳』や『御朱印軸』が登場してくる。戦前にも西国三十三所巡礼や四国遍路、あるいは全国の天皇陵や一宮を巡拝して御朱印を収集することは廣く行われていたが、特に戦後になり、西国巡礼や四国遍路が新しい旅のスタイルとして定着するようになると、巡礼による御朱印収集は一つのブームとして大流行してゆく」と述べており、江戸時代に使われ始めた御朱印が戦後の巡礼ブームによって、一気に庶民にも広まっていったことが分かる。

さらに、御朱印の意味合いの変化について八木は「そもそも『朱印』とは朱の印肉で捺したものを指し、元は寺院で写経し、それを奉納した証として授与されるものであった。今でも、御朱印のことを『納経印』とよんだり、御朱印帳のことを『納経帳』とよぶのもそのためである。やがて、社寺参詣が観光の旅と結びつき、一般参拝者が増加するようになると、御朱印本来の意味が忘れられ、経を納めなくとも、単に参拝した証として御朱印が授与されるようになり、このような慣習が神社にも影響を与え、後の時代には、寺院と同様に神社でも御朱印を出すようになったものと考えられる」と述べている。そもそも御朱印は「参拝の証」としての意味だけでなく、「護符」としての意味もある。神社の御朱印では、神社名を中央に書いて、朱印を押すところが多いため、「参拝の証」としての意味合いが強

いが、寺院の場合、「観世音」や「地藏」、「不動明王」など諸天善神の名前を中央に書くところが多い。これは、ただの参拝の証だけでなく、「護符」（お守り）としての意味合いももっている。日蓮宗が書く御朱印も中央に「妙法」や「一遍首題」を書くので「参拝の証」と「護符」の両方の意味を持っている。現在メディアが発達した今では、「参拝の証」や「護符」の意味合いに加えて、寺社の「宣伝」という意味合いも強くなっているという変化がある。

四、巡礼について

現在の御朱印巡り行動は巡礼行動から出てきた行動であり、巡礼行動をより宗教性や信仰性を薄めた行動が御朱印巡り行動である。そのため、今起こっている御朱印巡り行動と巡礼行動はまったく別ものである。しかしながら、元々御朱印は巡礼で参拝した証としてもらうものだったことから、巡礼と御朱印の歴史は密接なつながりがある。また、御朱印巡り行動についての研究はなく、巡礼行動に関する研究は多いという理由もあり、巡礼についての歴史も参考までに取り上げてみる。

巡礼行動の歴史を見てみると、現在巡礼コースはたくさんある。その中で一番古いと言われるものが、七一八年に徳道が始めたことに起源をもつ西国三十三箇所巡礼と七一三年に仁聞と法蓮が始めたことに起源をもつ九州西国観音巡礼である。どちらも奈良時代であり、少なくとも奈良時代には巡礼コースができあがっていたことがわかる。平安時代、鎌倉時代、室町時代にかけて巡礼を行う人が僧侶から上流階級へ広まっていき、一般の庶民に広まったのが江戸時代になってからである。これは、五街道や宿場ができるなど交通手段や施設の急速な発達など旅がしやすくなったためであり、このとき一気に巡礼旅行ブームが起こった。この時代の日蓮宗の場合、望月真澄著『江戸の法華信仰』^{※5}では、江戸時代の祖師信仰の一つとして「千箇寺詣」を挙げている。また、「法華信徒の巡拝形態の多くは日蓮宗寺

院のみを参拝するといった純粹な信仰を持つもので、この信仰形態が法華の巡拝の特徴」であり、「この純粹な法華信仰を持つ人々のことを堅法華と呼ぶ」と述べている。さらに、「法華の巡拝は基本的には納札を行わず、修行の証しとしてそれぞれの寺院で御首題帳に題目などを揮毫してもらい、『法華経』の「自我偈」読誦や唱題といった信仰行動をとるのが特徴」と述べている。

以上のように、御朱印巡り行動の歴史を「御朱印の歴史」と「巡礼の歴史」の両面から見ても、現在行われている御朱印巡り行動の「寺院を参拝して御朱印を頂く」という形は江戸時代にルーツがあることが分かったが、今の巡礼行動として御朱印巡り行動は昔と全く異なっていることが示唆され、今日行われている御朱印巡り行動は別のものとして取り上げなければならないことが分かった。

現在の御朱印巡り行動は二〇〇〇年代に入ってから「スピリチュアルブーム」、続いての「パワースポットブーム」、そして「御朱印ブーム」と一連のブームで繋がっている。これには宗教的なものに対する若い世代の興味が八〇年代以来ふたたび広まっているという特徴がある。そして、現在の御朱印巡りではどんな御朱印かだけでなく、どんな御朱印帳かまで興味が広がっているなど、「参拝する」目的から「収集する」目的へ変化している。これは「代理参拝」というビジネスが存在していることから伺える。つまり、現在多くの人が行っている「収集する」目的が強い御朱印巡り行動は「新たな宗教行動」であると考えるなければならない。

五、「旅に出る」心理

次に御朱印巡り行動を心理面から見えていく。御朱印巡り行動を心理面から見ると、その行動には大きく分けて「旅に出る」心理と「集める」心理があるのではないかと考える。

御朱印巡り行動は大きくカテゴリー化すれば、「旅」の一種である。心理学において「旅」について探してみると、

旅行に関する心理学研究はいくつかあった。「なぜ旅に出るのか」といえば、その旅の目的や種類によってその要因は異なるため、大まかな共通する法則もなく、一概には言えなかった。そのため、やはり「なぜ御朱印巡りに行くのか」と考えなければならぬのだが、現在の御朱印巡り行動を対象とした研究は見当たらなかった。一方で、社会心理学のなかでは、お遍路に関する「巡礼」の心理学的効果についての研究がいくつかまとめられている。そこで、「旅に出る」心理として御朱印巡り行動に近いと考えられる「巡礼」行動の心理学研究を取り上げ、それら研究から御朱印巡り行動の研究の糸口を探る。

そもそも「旅」と「巡礼」と現在の「御朱印巡り行動」はどのような位置づけなのだろうか。まず、巡礼の定義として星野英紀^{※6}によれば、巡礼とは「日常空間と時間から一時脱却し、非日常空間に滞在し、神聖性に近接し、再び日常時空に復帰する行動で、その過程にはしばしば苦行性と伴う」と定義している。さらに、藤原武弘^{※7}は「今日では、宗教的感情や信仰を伴わない、遊戯の世界も含めた行動も巡礼に含めざるを得ない」と述べている。つまり、御朱印巡り行動はこの遊戯的な巡礼行動にカテゴリー化されるわけであり、やはり巡礼行動と御朱印巡り行動は異なる行動であることが示唆される。また、藤原は「遍路を生み出す背景として、人生の転換点を迎えた中年が、将来への展望を模索しながら、自分の人生の再生、創造活動を賭けた行為が巡礼行動という形をとって現われたもの」として考察している。これは、金児暁嗣^{※8}も自己修養的行動は年齢が上がるにつれて増えていくが、現世利益的行動は逆に減っていく、五〇歳ごろになるとこれらの行動は大きく変化すると述べている。つまり、巡礼行動は五〇歳以上の人がよく行う自己修養的行動に分類され、御朱印巡り行動は若い世代がよく行う現世利益的行動に分類される可能性が示唆される。さらに、藤原は九つの視点から「旅」と「巡礼」を区別している。それは、一、Ambivalence（プラスとマイナスの両感情の経験）、二、Beauty（美への感動）、三、Companionship（仲間意識の意識）、四、Devotion（やまやまな資源の提供）、五、Exercise（修行性）、六、Freedom（自由性）、七、Goal（目標）、八、Happening（予測不可

能性)、九、Religiosity (宗教性)である。この中で巡礼に「しばしばあって」、旅に「ほとんどない」のが、四(さまざまな資源の提供)、五(修行性)、六(自由性)、九(宗教性)の四つである。定義づけの際、この九つの視点で見ることの妥当性があるかはまだ分からないが、研究の際に「旅」と「巡礼」、そしてそれらの間に位置する「御朱印巡り行動」がそれぞれどう違うかと整理しておく必要がある。

心理学研究を二つに分ければ、量的研究と質的研究に分けられる。巡礼行動の量的研究として、お遍路の社会調査を行った長田ら^{※9}(二〇〇三)の研究がある。それによれば、「遍路の場合は高齢者が多く、六〇歳以上三六、三%、七〇歳代二〇、二%、五〇歳代一六、二%で、五〇歳以上で七割以上を占める。男女の割合はほぼ同じである(男性四九、一%、女性五〇、九%)。職業分布でいえば、無職が三五、四%、主婦一九、三%、会社勤め一六、八%という比率になる。信仰する宗教は、真言宗(四一、六%)、浄土真宗(一三、五%)、禅宗(八、九%)、浄土宗(七、〇%)であり、信仰する宗教は特にないという人も一三、八%、キリスト教は1%であった。現住地は近畿(二四、〇%)、四国(二〇、二%)、関東(一四、六%)、中国(一三、六%)、九州(二二、五%)、中部(八、四%)の順である」と述べている。御朱印巡り行動にはこうした調査が見当たらないため、実際にどんな人が御朱印巡り行動を多く行っているのか定かではない。年代、職業、宗教、地域などどの社会的属性を取り上げるかの参考として上げた。

一方、御朱印巡り行動を量的ではなく質的に見ていく際に参考になるのが、藤原武弘の巡礼行動を「自己過程」のモデルに当てはめた研究である。藤原は中村陽吉の自己過程モデル^{※10}を取り上げているが、これによれば、自己過程は①自己の姿への注目の段階、②自己の姿の把握の段階、③自己の姿への評価の段階、④自己の姿の表出の段階の4つの段階に分類していると述べている。藤原はこれに基いて巡礼行動を見ており、①は自分が自分に気を向ける段階であり、「自分を見つめ直したい」「自分とはいったい何者なのか」という自分が自分を注目の的としている状態のこと(自覚状態)である。②は自己の状態の特徴を自分なりに描き、概念化する段階であり、「自分はお遍路さんになっ

た」という内面的なものと白装束や数珠などの服装や所持品など外面的なものからの姿がある（自己概念）。③は自己像に対して評価を行う段階であり、「どうしてこんなに苦しい思いをしながら歩かなければならないのか」など困難な事態を克服することによって自信や自己効能感が増大する（自尊感情）。④は自己の姿を他者に示す行動にかかわる段階であり、自分自身についての情報を他者に伝達する行為（自己開示）と自分にとって望ましい印象を他者に与えるために意図的にふるまう行為（自己呈示）の二つがあり、四国には接待という慣習が残っているため、遍路は地元住民から物質的な資源や宿泊場所での洗濯といったことを通して巡礼者と地域住民との相互作用があると述べている。

今の御朱印巡り行動にここまでの自己過程モデルが当てはまるのかと言えば疑問であるが、こういった過程を経て御朱印巡り行動を行っているのかというプロセスを見ていくことは必要である。

最後に興味深い研究が坂田正顕^{※11}のお遍路において交通手段で充実感が異なるといふ研究である。遍路に歩き遍路と車遍路の違いがあり、歩き遍路が充実感を感じるのとは、「徒歩遍路は霊場・山門に着いた時」、「お接待や親切に触れた時」、「長い道中を顧みる時」、「遍路仲間と話をする時」であり、バス遍路は「僧侶や先達の話聞く時」、「お大師様とともに歩いていると感じた時」に充実感を味わうと述べている。御朱印巡り行動においても、移動手段によって感じる充実感は異なることが示唆される。

以上、御朱印巡り行動の研究方法となる巡礼行動の研究を挙げてきた。定義づけでは「旅」、「巡礼」行動、「御朱印巡り行動」はそれぞれ異なる行動であり、「御朱印巡り行動」は「旅」と「巡礼」行動の間に位置することが示唆された。

六、「集める」心理

御朱印巡り行動に関わってくるもう一つの心理は「集める」心理である。誰しも一度は何かをコレクションした記憶はあるのではないだろうか。実は「集める」心理にもいくつか種類がある。コレクションすることによって達成感を感じる「コレクションの達成」（野村総合研究所^{※12}）や、過去の投資が将来の投資を左右する「サンク・コスト効果」（Arkes and Blumer^{※13}）によって、投資した額が膨大であるほど、投資を打ち切りがたくなり、収集にも同じことが言える。また、人は達成された課題より、達成できなかった物事や中断している物事に対し、より強い記憶や印象を持つ「ツァイガルニック効果」（Bluma Zeigarnik^{※14}）によって、無意識的に人は課題を完了しようとする行動もある。そして、必要性や実用的な価値だけでなく、それによって得られる周囲からの羨望のまなざしを意識して行う消費行動である「顕示的消費」（Thorstein Veblen^{※15}）などがある。こうした一般的な収集欲求も御朱印巡りに影響を及ぼしていると考えられる。

以上のように、御朱印巡りには「旅に出る」心理と「集める」心理が関わっていると考える。

七、まとめ

長い歴史のなかで庶民の文化として生き続けてきた御朱印巡り行動であるが、現在その実態を把握しようとした先行研究はほとんど見当たらない。しかしながら、御朱印巡り行動が庶民の文化として生き続けてきたからこそ、日本人の宗教意識に迫るには重要な宗教行動だと考える。また、御朱印は信仰の「信」「不信」に関わらず多くの人に親しめるものである。御朱印を書くことや御首題を書くことは一つの小さな布教である。それ自体には教化として大きな力はないにしても、人にお寺へ来てもらうためには大きな効果もっている。先述の中外日報の記事にあった通り、

御朱印巡りという行動でも「御朱印をもらう側」である一般の方と「御朱印を与える」寺院側で意識の大きな差がある。その溝を埋めるためにも御朱印巡りの実態を把握することは重要であると考える。

八、今後の展望

今後の研究では青年期と中高年期を対象に御朱印行動と意識との関連について見ていく。御朱印巡りをしている人たちは実際どのような行動を辿って寺社に来ているのか、その際どのような意識を持っているのか（きっかけや目的期間、宗教意識、死生観など）について調査を行い、御朱印行動を通しての日本人の宗教意識について考察する。まずは予備インタビューで質的研究を行い、御朱印行動を現在している人や今は御朱印行動をやめた人に聞き取り調査をし、御朱印行動の過程や流れについて把握し、それを元にアンケートを作成し、今後の研究とする。

- ※1 NHK放送文化研究所「宗教的なものにひかれる日本人 ISSP 国際比較調査（宗教）から」二〇〇九年五月
- ※2 藤山みどり「死後の世界（一） 現代日本のトレンドと報道」www.circan.jp/reports/02/detail?id=5077 二〇一四年八月九日
- ※3 中外日報 二〇一五年五月一日発行
- ※4 八木透「決定版御朱印入門」淡交社 二〇〇八年
- ※5 望月真澄「江戸の法華信仰」国書刊行会 二〇一五年
- ※6 星野英紀「四国遍路の宗教学的研究―その構造と近現代の展開」法蔵館 二〇〇一年
- ※7 藤原武弘「観光の社会心理学 ひと、こと、もの―三つの視点から」北大路書房 二〇〇六年
- ※8 金見曉嗣「日本人の宗教性―オカゲとタタリの社会心理学」新曜社 一九九七年
- ※9 長田攻一・坂田正顕・関三雄（編）「現代の四国遍路」学文社 二〇〇三年

- ※10 中村陽吉「『自己過程』の社会心理学」東京大学出版会 一九九〇年
- ※11 坂田正顕「現代遍路主体の文化人類型としての『徒歩遍路』と『車遍路』」社会学年誌、四〇、二七〜四六 一九九九年
- ※12 野村総合研究所「オタク市場の研究」東洋経済新報社 二〇〇五年
- ※13 Arkes, H.R. and Blumer, C. "The Psychology of Sunk Cost," *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, Vol.35, pp.124-140, 1985
- ※14 Bluma Zeigarnik "ON FINISHED AND UNFINISHED TASKS" *Psychologische Forschung*, 1927. 9
- ※15 Thorstein Veblen "The Theory of the Leisure Class" Macmillan, 1899.